

# 二十世紀の十大小説

映画文学人生論

篠田一士 (1927-1989)

『二十世紀の十大小説』(1985-88)「新潮」

『日本の近代小説』(1973)「集英社」

『日本の現代小説』(1980)「集英社」

『読書三昧』(1980)「晶文社」

十篇の二十世紀小説の一級品をえらび、批評家としての賭けをしてみよう

篠田一士『世界十大小説』のタイトルをながめて、これは『世界十大難解小説』ではないだろうかと思つた。これらの小説をぜんぶ読んで、理解し、感動した日本人が何人いるだろう。もちろん私の読書能力は基準にならないが、そんなに多くいるとはとても思えない。

「とにかく、いまのぼくが、自分の読書能力のかぎりをつくして、十篇の二十世紀小説の一級品をえらび、批評家としての賭けをしようというのがこの長編エッセイの発意」と篠田一士はいう。彼の読書能力を基準に考えてみよう。

プルースト 失われた時をもとめて

ボルヘス 伝記集

カフカ 城

茅盾 子夜

ドス・パソス U・S・A

フォークナー アブサロム、アブサロム！

ガルシア・マルケス 百年の孤独

ジョイス ユリシーズ

ムジール 特性のない男

島崎藤村 夜明け前

これら十篇のうち、私がなんとか読了できたといえるのは『城』と『夜明け前』だけだ。『百年



# 世界の十大小説

映画文学人生論

の孤独』と『ユリシーズ』も翻訳を通読したが、ほとんど理解できず、徒労感が残った。『失われた時をもとめて』は読みかけたものの、途中で挫折、残りの五篇はまったく読んでいない。

『失われた時をもとめて』は難解だが、現代小説といわず、およそ小説すべてのなかで、ただ一篇だけをえらべという難問を突きつけられたら、ためらうことなく、このプルーストの長編を挙げることができると、篠田一士はいう。

ところが、この長編小説は、分量の点で、普通一般の小説の十冊分は優にある。センテンスが長すぎて、読みにくい。内面心理の描写がえんえんと続き、筋のつながりがわからなくなってくる。

『源氏物語』五十四帖を読破してやろうと勇みたった読者の多くは第十二帖の「須磨」のあたりになると放りだす。『失われた時をもとめて』の場合は、第一篇の『スワン家のほうへ』を無事読み終えたものの、第二篇『花咲く乙女たちのかげに』の途中で挫折するという。

言われてみれば、私の挫折もその辺だった。再挑戦するにしても、今さら第一篇から読みはじめる気がしない。最終の第七篇『見出された時』を読めばいちばん大事な急所が不確かながら手づかみできるかもしれないと篠田一士は勧めるが、はたしてそれで失われた時がどこまで見出せるか。

熱い紅茶にプチットマドレーヌを浸して

食べた時

プルースト